

昔むかし、あるところに、ひとりの王子がいました。

ある日、王子は、リコッタチーズを食べているとき、ナイフで指を切ってしまいました。血のしずくがチーズの上に落ち、白いチーズに付いた赤い血がとてもきれいに見えました。

「白くて赤いこんなにきれいな娘がいたら、結婚したいなあ」と、王子は思いました。

そして、ミルクのように白くて血のように赤い娘をさがしに旅に出ました。小さな斧で木を切ってつえを作り、どんどん歩いていきました。

歩いて、歩いて、歩いていって、夜になると、王子は大きな栗の木の下にやって来ました。木の上で、一羽のみみずくが、陰気な歌を歌っていました。

「おい、いやらしいみみずくめ。陰気な歌はやめてくれ」

王子はみみずくめがけて斧を投げつけました。斧はみみずくに当たって、木のみきにさりました。みみずくは歌うのをやめました。

王子はまたどんどん歩いていきました。

何日も何日も歩きましたが、ミルクのように白くて血のように赤い娘は見つかりません。王子は、探しつかれて、城にもどることにしました。

あの栗の木の所まで来ると、木の根元に、ひとりのおじいさんが腰をおろしていました。おじいさんには、片目がありませんでした。おじいさんは、王子に、話しかけました。

「わしの目を取ったのはおまえなんだよ」

王子は、おどろいて、

「わたしは、あなたの目を取ったりなんてしませんよ。あなたに会ったこともないんだから」といいました。

「いや、おまえはわしに会ったことがある。わしは、魔法使いに魔法をかけられて、みみずくの姿になっていたんだ。おまえが、斧でわしの目を取ってくれなかったら、わしは永久にみみずくのままでいなくてはならなかった。だから、わしもおまえのために何かしてあげよう。いったい何を探しているのだね」

王子はいいました。

「わたしは、ミルクのように白くて血のように赤い娘を見つけて、結婚したいと思っているのです」

おじいさんは、

「ではわしについておいで」といって歩きだしました。

王子はおじいさんのあとから、歩いて、歩いて、歩いていって、やがて、広い原っぱにやって来ました。そこにはオレンジの木がたくさんあって、よくうれた実がいっぱいになっていました。おじいさんは、

「さあ、あそこへ行つて、オレンジの実を三つ取っておいで」といいました。王子は、

そんなことをして何になるんだろうと思いましたが、オレンジの木立の中に入って行って、実を三つつみました。そして、おじいさんの所にもどるとちゆうで、オレンジをひとつ、むいてみました。すると、いきなり、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。王子が驚いていると、娘は、

「眠いの」といいました。王子はどうしていいかわかりませんでした。すると、娘は、いきなり消えてしまいました。

「とんでもないことをしてしまった」と、王子は思いました。

王子は、おじいさんの所にもどつてきて、

「オレンジをひとつむいてしまったんです。そうしたら、ミルクのように白くて血のように赤い娘が出てきたんだけど、眠いといったきり、すぐに消えてしまいました」といいました。おじいさんは、

「しようがないやつだ。わしのゆるしもなしにむいてはいけなかったんだ」といいました。

それから、おじいさんと王子は、王子の城に向かいました。ところが、とちゆうで、王子はがまんできなくなつて、こつそりふたつ目のオレンジをむいてしまいました。すると、また、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。前よりもっと美しい娘でした。娘は、

「お腹がすいているの」といいました。王子がどうしていいか分からないうちに、娘はいきなり消えてしまいました。

王子が急いで追いつくと、おじいさんは、

「もうひとつのオレンジはどうしたんだ」とききました。

「どうにもがまんできなくて、むいてしまったんです。そうしたら、ミルクのように白くて血のように赤い娘が出てきて、お腹がすいたといったきり、すぐに消えてしまいました」

「しようがないやつだ。わしのゆるしもなしにむいてはいけないといったじやないか」

ふたりは、歩いて、歩いて、歩いていって、やっと、王子の城に着きました。おじいさんは、王子に、りっぱな部屋と飲み物を用意させました。そして、その部屋で最後のオレンジをむくようにといました。王子がオレンジをむくと、前の娘たちよりもっと美しい、ミルクのように白くて血のように赤い娘があらわれました。娘は、

「のどがかわいているの」といいました。王子はすぐに飲み物を飲ませました。娘はこんどは消えませんでした。おじいさんは、

「これがおまえの花嫁だ。わしの目をとってくれたお礼だよ」といって、どこかへ行つてしまいました。

王子は、ミルクのように白くて血のように赤い娘と結婚しました。ふたりは幸せでした。

ある日、王子は、森へ狩りに出かけました。娘は、城のバルコニーで髪をとかしていました。すると、バルコニーの下の泉に、年とつた魔女が洗濯をしにやって来ました。

魔女は、水に美しい娘がうつっているのを見て、

「みんなはわたしのことをみつともないっていうけど、わたしはこんなに美しいんだ」と思いました。けれども、よく見ると、それは自分のすがたではないということに気がつきました。魔女は、バルコニーを見上げました。すると、王子の妻が髪をとかしていました。魔女は、

「わたしは髪をとかすのがとても上手なのよ。わたしがとかしてあげましょう。もつと美しくなりますよ」といいました。娘は、

「ではお願いするわ。どうぞ、上がってきてくださいな」といいました。

魔女は、すぐに階段を上がっていき、くしを取って、ミルクのように白くて血のように赤い娘の髪をとかしはじめました。そして、いきなり、魔法の針を娘の頭にさしました。たちまち娘はつばめになって飛んでいってしまいました。魔女は、

（永久にここに住みついてやるう）と考え、部屋を閉め切ってベッドに入り、魔女だと気付かれないように、頭から毛布をかぶっていました。

召使いの女が朝ごはんを持ってきて窓を開けようとすると、魔女は、毛布をかぶったまま、

「まどを開けないでちょうだい。風に当たると気分が悪いから」といいました。

王子が狩りから帰ってくると、娘のすがたがありません。召使いの女にたずねると、お妃は窓を閉めたまま、まだベッドにしていると答えました。王子は心配になって部屋に行ってみましたがお妃に化けた魔女は、どうしてもベッドから出ようとしませんでした。

あくる日、召使いの女が夕食のしたくをしていると、台所の窓辺につばめが一羽飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。召使いが、

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」と答えると、つばめは、いいました。

「わたしも昔は美しかったです。でも今はつばめでいなければならぬの。わたしに食べ物をくださいな。そうしたら、わたしの金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れて窓辺に置きました。つばめはそれをぜんぶついばむと、つばさから金の羽を一枚ぬいて皿に置き、飛んでいってしまいました。

召使いは、金の羽を王子に見せようと、ふたりの部屋に持って行きました。王子は、

「なんて美しい羽根だろう。わたしもそのものいうつばめを見たかった」といいました。

魔女は、ベッドの中から、

「そんな鳥なんか見ないでちょうだい」といいました。

つぎの日、召使いの女が夕食のしたくをしていると、またつばめが飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。召使いが、

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」と答えると、つばめは、いいました。

「わたしに食べ物をくださいな。金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れて窓辺に置きました。つばめはそれをぜんぶついばむと、金の羽を一枚、皿に置いて、飛んでいってしまいました。

召使いは、金の羽を王子の所へ持って行きました。王子は、

「なんて美しい羽根だろう。わたしもそのものいうつばめを見たかった」といいました。

魔女は、

「そんな鳥なんか見ないでちょうだい」といいました。

三日目、また窓辺につばめが飛んできて、

「王子さまはどこかしら」とたずねました。召使いが、

「美しいお妃さまとお部屋にいらつしやるよ」と答えると、つばめは、いいました。

「わたしも昔は美しかった。でも今はつばめでいなければならぬ。わたしに食べ物をくださいな。金の羽をあげましょう」

召使いは、食べ物を皿に入れて窓辺に置きました。そして、すぐに王子に知らせに行きました。王子が急いで台所に来てみると、つばめはせつせと食べ物をついばんでいました。王子は、

「ああ、なんて美しい鳥なんだ」といって、つばめの頭をなでました。すると、何か固いものが指に当たったので、引き抜いてみました。それは、魔女の針でした。針を引き抜いたとたん、つばめの姿は消えて、そこにミルクのように白くて血のように赤い娘が立っていました。

悪い魔女は、火あぶりにされました。

王子とミルクのように白くて血のように赤い娘は、今でも、城で幸せに暮らしています。

原話：『イタリヤの昔話』 剣持弘子編訳／三弥井書店

再話：村上郁